

一部 ¥200

2019.7.01発行

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10 VIP関西センター3F
TEL. 072-867-6721 FAX. 072-867-6721Eメール lcjefapan@hotmail.com
ホームページ LCJEJAPAN.com

郵便振替 LCJE日本支部・00950-4-25633

P2▶4
NAR運動 LCJE 日本支部P4▶5
シオンとの架け橋 石井田 直二P5▶7
ティックーン・ジャパンパートナーシップP8
お知らせ 事務局より

巻頭言

ハレルヤ!

世界初、聖書のイスラエル手話訳が
本格的にスタート!

メシアの家代表 網本 バフロ

現実として、イスラエルのことを学び、イスラエル支援をしている“ろう者のキリスト信者”や、そして団体としてイスラエルを支援している、ろう者の教会は残念ながら少ないです。そこまでイスラエルを支援する必要があるのか、と疑問視する教会がほとんどなのですから。そのような中で、私たちの団体「メシアの家」では、イスラエル支援をビジョンのひとつとして掲げ、イスラエルのお祭りを開催したり、イスラエルのろう者とつながるために、様々なアクションを起こしたりしています。現在のところ、イスラエル支援をしているろう者の教会は、日本で一つ、「メシアの家」だけです。

少し前に嬉しいニュースが届いたので、それを皆さまにご紹介したいと思います。聖書は世界各国で翻訳されていますが、ろう者の言葉である手話にも翻訳されているかという、まだまだだという状況であります。驚くことに、イスラエル手話にも、まだ翻訳されていなかったのです。聖書はイスラエルから来たものなのに、イスラエル手話に翻訳されていないのはおかしな話であると思いませんか。それが、アメリカにあるふたつの団体、DOORというろう者専門神学校と、デフミッションがコラボレーションして、旧約聖書をイスラエル手話に翻訳するプロジェクトが発動されたのです。

昨年イスラエルに行った時、ろうセンターで偶然、神学校の校長と再会し、その再会を喜び合い、色々なことを語り合いましたが、その時がまさにプロジェクト進行の最中だったのです。以前、プロジェクトチームのメンバーが、イスラエル旅行でイスラエルのろう者と交流していた時に仕事の話になり、イスラエルのろう者が興味を持ち、イスラエル手話への翻訳を依頼したのが発端だそうです。私自身、DOOR神学校の卒業生でもあるので、彼らのプロジェクト発動のことを聞いて、とても嬉しく思いました。旧約聖書のみ翻訳だということでしたが、それでも主の言葉でもある聖書がイスラエル手話に翻訳されて、多くのイスラエルのろう者が目にするのは、大変喜ばしいことであり、新約聖

書にふれるきっかけになると信じています。(ローマ 10:14)

旧約聖書がイスラエル手話に翻訳されるということは、イスラエルでの伝道のスタートラインに立てる、ということです。世界のキリストの歴史においても、旧約聖書がイスラエル手話に翻訳されることは重要なことであり、記念すべき出来事でもあります。イスラエルよりも先に世界のいくつかの国がその国の手話に翻訳されたが、それはイスラエルにねたみを起こさせるもの、という聖書の言葉を思い出させます。(ローマ 11:11-12) イスラエルのために世界はあり、世界はイスラエルによって存在しているといえるでしょう。

世界には聴者だけでなくろう者も存在しています。主はろう者を自ら作られました。よって、黙示録に記載されている14万4千人の中にろう者もいるはずなのです。(ヨハネの黙示録 7:4-8) 主はろう者の為にも計画を用意されており、奇跡を起こされる、と私は確信しています。

私も、聖書の言葉をイスラエル手話に翻訳するプロジェクトに協力するため、日本のろう者の教会を周り、イスラエルの情報を提供しながらイスラエルへの寄付を募っていく予定です。一人ひとりのろうキリスト信者が、さらにイスラエルに関心を持ち、聖書にある、真のキリスト信者のモデルに近づいていけるように、私自身も学びながら働きかけたいと願っています。それが、それぞれの教会のユダヤ性回復に繋がるはずだと思います。

聴者の教会にもお呼びいただければ、イスラエルのろう者のことについてお話ししたいと思っておりますので、ご興味のある方はぜひご連絡下さい。聖書はイスラエルから。そのおかげで私たちも救われているのです。(ローマ 11:17-24) その恩を忘れず、協力しあいながらイスラエルを支援していきましょう!

主のご計画が完成されるよう、これからも祈り続けていきます。▶「メシアの家」の連絡先 info@hom-japan.com

ティクーンの教理は何を教えているか (第3回)

スカット・デイビッド・コングリゲーション長老 シモン・アミット 翻訳：佐野剛史

本記事は、著名なメシアニックジュー指導者であるダン・ジャスターが代表を務める宣教団体「ティクーン」の教理を批判的に分析したものです。著者は、公開資料を引用しながら、ティクーンの思想的背景と最終的な目標、今話題になっている新使徒的宗教改革 (NAR) 運動との関係、ティクーンが推進する TJCII (Toward Jerusalem Council II: 第二エルサレム会議に向けて) 運動の背景にある考え方などを分析し、ティクーンという組織をよく吟味するように読者に呼びかけています。

この記事は、計6回の連載の予定でしたが、都合により3回で打ち切りとなりました。ただ、訳文の全文を LCJE のウェブサイト上で公開していますので、続きを読みたい方は読めるようになっています (<https://lcjefrance.com/literature.html>)。また、訳者である佐野が、現代の使徒について個人的見解をまとめてインターネット上で公開していますので、興味がある方はそちらもご覧ください (<https://biblical.jp/modern-apostles/>)。

【これまでの内容】

ティクーンの教理を理解するには、まず背景にある考え方を知ることが大切です。そこで今回は、ティクーンの教理に影響を与えている現代のレストレーション主義、後の雨運動、新使徒的宗教改革(NAR)を紹介しました。今回は、新使徒的宗教改革 (NAR) とティクーンとの関係、そしてティクーンがどのような釈義 (解釈の方法) で教理を構築しているのかを見ていきます。

2.4 新使徒的宗教改革 (NAR) 【後半】

2001年には、全世界の使徒たちの活動を調整し、より効果的に神の国を推進することを目的として、使徒組織 ICA が設立されました。ICA は、NAR に関連する使徒運動の統括団体となっています。また、国ごとに認定された使徒のリストを管理しています。ダン・ジャスターは、この組織に登録されている使徒で、ICA の設立メンバーでもあります。この組織のウェブサイトでは、次のように主張されています。「ネヘミヤ 2:5 で、ネヘミヤは王に、自分を王の権威を帯びた使者 (シャリアハ) として、エルサレム再建の責任者として遣わしてほしいと願い出ています。ネヘミヤは、使命を帯びた使徒 (シャリアハ) となることを願ったのです。ネヘミヤ 2:6 のみことばは『王は快く私を送り出してくれた』と語っています。また、王から現地で任務に就いている人々に対し、ネヘミヤが使命を帯びていることを認め、支援するように要請する手紙が書かれました。ネヘミヤは到着すると、エルサレムとユダヤでアルタクセルクセス王の働きを司る総督 (ペハド=監督、司教の意) に任じられました。その地域の支配者たちは、ネヘミヤを国家元首のように扱いました。ここに、使徒が本当はどのような存在であるかを示す例があります。ネヘミヤは、統治を打ち立て、秩序を保つアルタクセルクセス王の将軍、使徒 (シャリアハ) でした。今日の使徒は、任命された領域で神の統治を打ち立て、秩序を保つ神の代表なのです」。

2011年に、ワーグナーは「The New Apostolic Reformation is Not a Cult (新使徒的宗教改革はカルトではない)」という記事を『Charisma (カリスマ)』誌に発表しました。ワーグナーが記事を書いた理由は想像に難くありません。メディアの取材や、世界中のキリストのからだからの批判で、NAR は「カルト」であるという汚名を負っていました。この記事でワーグナーは、NAR はカルトでも、

階層やメンバーシップのある組織でもなく、世界中の会衆、教会で起こっている現象の総称であると説明しています。また、ムーブメントに反対する主張を一掃し、NAR をもっと正確に定義しようとした。ワーグナーは、多くの人々は NAR を同質的な使徒運動と思っているが、実際には「終わりの時代に使徒と預言者の職を回復する」という共通の目標を持った、異質な諸運動の集まりを指す総称にすぎないとしています。そのため、ある人が NAR に公式に属しているとは言えない、そのような組織は存在しないからだ、というような主張になります。このような精神で、NAR の関連組織は、自分たちが NAR に属していることを何が何でも否定しようとするのが習慣となっています。

2012年に、ワーグナーは『Apostles Today (現在の使徒たち)』という書籍を執筆しました。その中でワーグナーは、神がジャスターに「ユダヤ人の使徒」として授けた権威を認めています。「地域を担当する使徒の下位概念に、特定の民族への使徒的リーダーシップを授けられた使徒があります。聖書の例でいうと、ペテロとパウロでしょう。当時の主要な民族的区分は、ユダヤ人と異邦人でした。神は、ペテロを『割礼を受けた者』、つまりユダヤ人の使徒に任命し、パウロを『割礼を受けない者』、つまり異邦人の使徒に任命しました (ガラ 2:7 参照)。どちらもガラテヤやアジアといった地理的に同じ領域で宣教しましたが、一方は主にユダヤ人に、もう一方は主に異邦人に仕えました。今日の例でいうと、ダン・ジャスターと私の違いのようなものでしょう。どちらも ICA の使徒会議のメンバーで、どちらも米国にミニストリーがあります。しかし、ダンには主にユダヤ人に仕え、私は主に異邦人に仕えているのです」(『Apostles Today』第7章「Territorial Apostles (地域を担当する使徒)」)。

ジャスターの側も、2017年に出版された新刊で次のように書いています。「この聖書と注釈のセレクションで目的としていることは、ピーター・ワーグナーが新しい使徒的教会と呼んだこの運動の根拠となる証拠を新しい視点から眺めることです (Baker から 1998 年に出版されたワーグナー著『The New Apostolic Churches』を参照のこと)。この運動が重要な聖書的真理の発見であるなら (私はそう信じますが)、メシアニックジューには使徒と統治組織という問題をよく調べてみる義務があります。実際に、メシアのからだの統治組織はイスラエルから生まれたのですから」(『Apostolic Ministry and Authority』P. 5)。

3 釈義の土台

この章では、ティックーンの使徒たちが、ティックーンの教理の土台を築いた方法をいくつか見ていきます。

3.1 超自然的な啓示

[0:16] 私たちが行っていることは、すべて36年前(1981年)に私たち(ジャスターとイントレーター)が受けた啓示と関係しています。…

[0:37] それはイスラエルで教会が回復することに関する啓示です。この啓示は、主とのデボーションの時に超自然的に受け取ったものです。

[1:33] 私たちが行っていることは、すべて次に紹介する2つの聖書箇所に関係しています。イエシュアはヨハネ17章の20節以降で次のように語っています。「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らが見な一つとなるためです。また、彼らもわたしたちになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです」

(ヨハネ17:20～23)。

主がこの聖書箇所を私に示してくださった時、主が再臨する前に、「信者のからだの一致」と呼ばれる現象が全世界レベルで起こることがはっきりとわかりました。それまで、私たちのほとんどはそのようなことを考えてもいませんでした。かつてある教団にいた時、私はエキュメニカル(教会一致)推進委員会の委員を務めていました。この委員会では、さまざまな教団教派から代表者が集まって、シカゴの町で宣教協力をしようとしていました。それは1970年代のことで、随分昔のことです。とは言え、それは深い絆で結ばれた一致ではなく、イエシュアがここ(ヨハネ17章)で祈っておられるようなものではありませんでした。そのようにして、私はさまざまな教派が存在する町々や地域でそのような深い絆で結ばれた一致が見られるようになる必要があること、また各教派のアイデンティティは次第になくなっていき、共通のアイデンティティで結ばれる必要があることを理解しました。

そのことに気付いた時は、ちょっとした衝撃を受けました。おかしな話です。私は1960年から信者のからだの一員でしたが、1981年の当時まで、21年間も、このことについて教えられたことも、考えたこともなく、私にとってまったく新しい考え方だったのです。しかし主は、このことをエペソ4章とも結びつけて教えてくださいました。(ヨハネ17章)この気高く高尚な一致の理解が、エペソ書の4章で具体的な形で示されているのです。私の中で、ヨハネ17章とエペソ4章が結び付きました。

主が、この啓示体験を通して、2つの聖書箇所を結び付けて考えるように導いてくださったのです」

(ジャスターの動画「Restoring the Church and Israel(教会とイスラエルの回復)」11秒～8分11秒)。

ジャスターは、ヨハネ17章とエペソ4章の理解は神から受けた超自然的な啓示によると主張しています(「主がこの聖書箇所を私に示してくださった」)。自分に啓示されたこの2つの聖書箇所に関する新しい理解は、啓示の前にはなかったものとし(「私はこのことについて…考えたこともなく」)、これまで誰も自分に教えてくれなかった(「教えられたことも…なく」)、「まったく新しい考え方だった」としています。ジャスターは、自分とイントレーターが行っていることは、主から直接受けた超自然的な啓示という土台に立っていると語っていることとなります。ここで注目すべきポイントは、ジャスターが受けたと主張しているのは個人的なレベルの啓示ではなく、歴史的なレベルの啓示だということです。啓示されたのは、終わりの時代に、五役者(使徒、預言者、伝道者、牧師、教師)の働きによって世界中の信者が一致するという内容です。これは個人的な啓示ではなく、終わりの時代のキリストのからだに関する預言的、終末論的な啓示です。

3.2 2つの神学の融合

ティックーンの教えは、2つのよく知られた神学を組み合わせたものです。その2つの神学とは、「旧約聖書の預言者が告げていたとおりにメシアの再臨時にイスラエルの王国が回復する」という一般的なメシアニックジューの教えと、「メシア再臨の前提条件として、再臨の前の終末時代に教会が回復する」という現代のレストレーションの教理です。ジャスターは、ティックーンの使徒は「今ここにある御国」と「将来に実現する御国」の両方を信じていると宣言しています。彼らは、主の再臨の前に世界大の霊的リバイバルが起こると信じていますが、それと同時に主の再臨時に被造世界が贖われることも信じているのです。

3.3 預言の私的解釈

ティックーンの使徒は、終末時代に使徒の権威の下で教会が回復するという主張を裏付けるため、千年王国に関する旧約預言を用います。さらに、そうした預言には二重の意味があると、実際に神の国の預言は部分的にせよ全部にせよ、2度成就すると教えます。1度目は使徒によって教会が回復した最後の時代に、2度目は千年王国の時代に成就するという主張です。

ティックーンの使徒の「終わりの時代に異邦人がエルサレムに巡礼し、エルサレムに富をもたらす」という預言の使い方に、それがよく表れています(イザヤ60:5、9、11、ゼカリヤ14:14、黙示録21:6)。イントレーターはこう問いかけます。「こうした箇所が、私たちが生きている時代に、たとえ一部であっても成就するのでしょうか。富は教会に、またイスラエルに流れ込んできているのでしょうか。どちらも、ある程度は実現していると言えるでしょう。もしそうであれば、おそらくメシアを待ち望むレムナント(残りの者)のために、二重の成就があるのです」。言い換えると、千年王国でエルサレムに富がもたらされるという預言は、二重預言
…………… 4P 下段へ続く ▶



「知らずに共存」から「知って共存」へ

シオンとの架け橋 石井田 直二

LCJEニュース5月号に、ティックン・ミニストリーズとNAR（使徒的宗教改革運動）を強く批判する文書が掲載され、それに続いて7月号からティックン側の主張も掲載しています。この事で驚いておられる方も多いと思いますので、その背景について私たちの立場から解説させていただきます。

■今まで存在していた協力関係

NARという運動は20年以上も前に始まったものですが、明確な定義はありません。「使徒・預言者の回復」が特徴の一つですが、「使徒」の役割や機能についての考え方は、グループや個人によって様々です。世界中で「使徒」の称号で呼ばれる人々は千人単位でいると言われますが、その中には現在の「使徒」に聖書時代の使徒と同等以上の権威を認めるなど、かなり行き過ぎた人々も混じっているため、各教会やグループがそれぞれの判断により関係を持っています。ちなみに、今回非難されているティックンは、一部のNAR批判書に名前が登場する程度で、NAR運動の中心団体ではありません。

日本にNAR運動が紹介されたのは20年以上も前です。現在ではこの動きをプラス評価し「使徒」や「預言者」を招いている教会は、聖霊派の中でかなりの存在感を持って

います。そうした教会は、福音派系の様々な超教派ミニストリーも熱心に支えています。この20年間、福音派と親NARの諸教会は同労者の関係でした。

イスラエルでも状況は同じです。「使徒」という称号は積極的にイスラエル国内では用いられて来なかったものの、親NARのメシアニック団体は20年以上も前から存在し、他団体と共存・協力して来ました。この背景には、見解や立場よりも、個人的信頼関係を重視するというイスラエルの文化があるのです。

一方、世界各地からイスラエルのメシアニック運動を支えて来たクリスチャンの多くもまた、親NARの人々でした。日本で出版された書籍にはあまり紹介されていませんが、イスラエルやユダヤ人を愛し支持すること、メシアニック運動を支援することは、NAR運動の特徴の重要な一部なのです。
(右ページへ)

◀ 3Pからの続き

だということになります。つまり、キリストが再臨する前の回復した教会の時代、そしてキリストが統治する千年王国の時代の両方で成就するというのです。

イントレーターはこう続けます。「最近、エルサレムのアハバット・イエシュア(イントレーターが牧する会衆)で、『異邦人の富が来て、使徒たちの足もとに置かれるように』とへりくだりつつ教え、祈りました。その5日後、地球の裏側から1本の電話がありました。同じ頃に大口の献金することを考えていたという1人の愛すべき聖徒からでした。その方は、『そのお金を取って、アシェルの足もとに置きなさい』という神からの語りかけを聞いたと話してくれました。願わくはこれが超自然的なしるしとなり、使徒のビジョンが私たちの時代に完成するように、ほかの多くの人々にもリソースが注がれますように」。この例を見てもわかるように、異邦人の富を使徒の足もとに置くという教えは、今の時代にも目に見える具体的な側面があるというのです。

ピーター・ワグナーは、『The Great Transfer of Wealth: Financial Release for Advancing the Kingdom(富の大移動：御国を前進させる財政的な解放)』という著書で、千年王国の時代に諸国民の富がエルサレムにもたらされるという預言を読み換えて、御国の働きの前進と社会の変革をもたらすために異邦人の富が教会にもたらされると語っています。また、ワグナーも、ICAのカンファレンスで人々が「貧困の霊を打ち破り」、使徒の足もとに現金を置いた時に、「富を使徒たちの足もとに置いた」という同じ表現を使っています。

3.4 デラッシュ(Derash)

ティックンの使徒は、終末時代に起こる一連の出来事は、使徒の働きを最後から最初に向かって逆方向に読むと、この書の中に預言されていると教えます。この逆方向に読むという発想は、最初の使徒の時代には福音がエルサレムから異邦人に向かったが、最後の使徒の時代には異邦人からエルサレムに向かうという考え方にに基づきます。イントレーターは、この考え方を著書の『Israel, the Church and the Last Days(イスラエル、教会、終わりの時代)』の第4章「The Book of Acts Reversed(使徒の働きを逆方向に読む)」で教えています。

使徒の働きを通常の読み方で最初から最後まで読むと、イエスは1章で、イスラエル王国が回復する日は来るが、それがいつとか、どんな時とかいうことは弟子たちは知らなくてもよいとおっしゃっています(1:6~7)。その後、イエスは昇天し、弟子たちはエルサレムにとどまって祈ります。2章に入ると、聖霊が注がれ、霊的なリバイバルが起こります。2~4章では、教会は使徒の権威と教えの下で一致団結します。6~9章では、教会がユダヤ、ガリラヤ、サマリヤに建て上げられます。9~12章では、福音が広まっていきます。12~15章では、教会が強められます。15~28章では、コリントやローマといったヨーロッパの大都市に福音が伝わります。そんな中で、15章の使徒会議(エルサレム会議)は、ユダヤ人の中で神の国が広がる段階から、諸国民の中で神の国が広がる段階へと移り変わるちょうど分水嶺となっています。(続きはLCJE日本支部ウェブサイト[<https://lcjehome.com/literature.html>]をご覧ください。)

■論争にゆれるメシアニック運動

今回の騒ぎの発端は、約2年前にティックンがNAR系であることを「発見」した人々が強い反対意見を発信し始めたことでした。当初、NARを知る人々は「何を今さら」という反応でしたが、伝統的立場の人々からは「自分は使徒だと称する困った連中が現れた」という強い懸念の声がかんじられて来ました。しかし、中間派の指導者たちは「双方が互いに学び合うべきだ」と話していたので、私たちは、たぶん着地点が見いだされるものと楽観していたのです。

ところが、昨年秋頃になっても、一向に議論が沈静化しないばかりか、ますます激化するようになりました。そして、アミット師やヘンドレン師らがティックンを批判する文書（LCJEニュースに連載）を数か国語に翻訳し、イスラエルのメシアニック共同体の総意であるかのような印象を与えつつ世界中に配布したため、問題がイスラエル以外でも表面化しました。

その後、中間派の指導者たちと連絡を取ったところ、昨年とは態度が一変し「この問題は非常に微妙な問題なので、現時点で私の意見は言いたくない。メシアニック共同体として、まだ何も意思決定をしていないのだから、何らかの結論が出ているという印象の報道は絶対にやめてほしい」と言われるのです。

イスラエルには、聖霊派も非聖霊派も共に議論して意思決定ができる全体会議（ケネス・アルツィ）があります。ちなみに、この会議では、以前にヨセフ・シユラム師の見解について「異端ではない」との結論が出されたこともありましたが、しかし、この会議で「使徒問題」について全員が納得できる結論を出すのが極めて困難であることは多くの人が認識しています。これをきっかけに、何十年も保たれて来たイスラエルのメシアニック運動の一致が失われる危険性が見えて来ました。

■今まで「知らずに共存」していた

今回の事件で、私が感じたのは、イスラエルでも日本でもNARについて「知らない人が、こんなに多くいたのか」という衝撃です。私は福音派系教会で育ったので、最初に「あなたは、まだ『聖霊のバプテスマ』を受けていないのですか」と言われた時は、とても驚きました。ですから「使徒・預言者と称される人々がいる」と初めて聞いた方々の驚きと戸惑いは、よく理解できます。

しかし、イスラエルでも日本でも、私たちはすでに何十年も親NARの人々と共存し、共に働いて来たのです。でも、多くの人々は「知らずに共存」して来たのです。私たちは、これから壁を作って共存をやめるべきなのでしょうか、あるいは「知って共存」の道を歩むべきなのでしょうか。イスラエルでも日本でも、ピリーバーが後者の道を選ぶことができるようにと、私は願っています。

シモン・アミット氏の本誌連載原稿に対する応答

ティックン・ジャパンパートナーシップ代表世話人

ホープチャペル 主任牧師 スティーブン・ケイラー 日之出キリスト教会 牧師 行澤 一人

本誌235号において連載が開始されているシモン・アミット氏の論文（邦訳）「ティックンの教理は何を教えているか」については、その元となる英語原稿に対するティックンによる公式のコメント（英語）が既に提出されているので、本稿はその邦訳を紹介するものです。シモン・アミット氏の論文については、あくまで氏個人のTikkunに対する批判的見解を披歴するものでしたが、これを契機にイスラエルのメシアニック共同体において重要な神学的対話が開始されたことは、既に本誌236号において説明されている通りです。その対話が進展する中で、Tikkunの神学的立場に違和感を覚える方々が、その対話の成果を十分に踏まえないまま、やや一方的な仕方でもTikkunへの批判を日本で展開されたのは残念なことでした。しかし、LCJE日本支部の運営委員会が、公平性を重視し、このようにTikkunの立場を本誌において弁明する機会を提供してくださったことについては、その見識に敬意を表するとともに、心から感謝を申し上げる次第です。本稿が、イスラエルを愛し、その救いを心から願っておられるLCJE日本支部の諸兄姉にとって、今日のメシアニックムーブメントの多様な広がりや理解するための一助となり、さらに私たちが志を同じくして共にイスラエルの救いと異邦人の完成のために励んでいけるようになることを願ってやみません。

本稿は、Tikkun Japan Partnership（以下、TJPと記す）の立場を代表して行澤一人が翻訳・執筆の責任を負いました。そこで、TJPについて一言申し添えさせていただきます。TJPは、決してTikkunの支部でもなければ、Tikkunから何らかの指揮を受けるような組織関係にもありません。むしろTJPは、日本における「キリストのからだ」に属し、日本の地方教会に対して一義的な責任を負いつつ、Tikkunのビジョンと神学に共鳴する者たちの交わりです。そして、私たちが共有する価値は、Tikkunとの交わりを通じて、彼らもその一部であるイスラエルのメシアニックムーブメントと共に「新しい一人の人」（エペソ2:15）として建て上げられ、そこに啓示された神の奥義（エペソ3:6）を体現する者とならせていただきたいという切なる願いと祈りに根差すものであります。

「Tikkunの回復主義神学に基づく声明」（1）

2018年8月

本論文はAriel Blumenthalが執筆し、Dan Juster、Asher Intrater、Eitan Shishkoff、Ron Cantor、Guy CohenそしてGil Afriatがこれを承認した。

序章

Tikkun ミニストーリーは、Dan Juster、Asher IntraterそしてEitan Shishkoffのパートナーシップとして約40年前に始まりました。このリーダーシップチームには、初めからMichael Brown、Paul Wilbur、David Rudolphそ

して Don Finto が加わっていました（全員が今日もそうであるというわけではありません）。

Tikkun の幻は、初めから「イスラエルと教会の回復」という包括的なものです。そのための中心聖句は、使徒 3:20 - 21 におけるペテロの第二の説教です。

「20 こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。21 このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。」
(新共同訳) (下線訳者) 1。

ヘブル語訳新約聖書においてこの「万物が新しくなる」〔(ギ) アポカタスタス〕を示す言葉は Tikkun です(以下、この言葉を「回復」と訳します。訳者)。文脈上、ペテロがここで語っているのは、明らかに旧約預言に従ったメシアによるイスラエルの回復についてであり、五旬節/ペンテコステの日に誕生したばかりの新約教会の回復のことではありません。もっとも私たちは、初めの数世紀以来、暗黒の時代を経験してきた教会には、今まで多くの領域で回復されるべき必要があったことを信じています。それゆえ、この回復もしくは Tikkun というテーマは、初めから私たちのミニストリーの旗印でありました。

使徒の働き 3:21 を学ぶとき、一つの疑問が脳裏に浮かんできます。「回復」というとき、ペテロや初代教会の使徒たちは、これがイエシュアの再臨「までに」起こることだと信じていたのでしょうか、それとも主イエシュアの再臨時に起こると信じていたのでしょうか。この問題は終末論における大問題として多くの論争を引き起こし、教会に分裂さえ生み出してきました。神の御国の広がり、旧約聖書の成就、イスラエルの回復、大宣教命令の達成等々について、どこまでがキリストの再臨までに実現することを我々は期待すべきでしょうか？そしてキリストが再臨され、地を治め、支配するときに起こるべきものとして、どれくらいの部分が残されているのでしょうか。確かに最近の Tikkun に対する、イスラエル人リーダーからの批判のおよそ半分は、この終末論的成就のタイミングとその条件に集中しています。そしてあと半分の批判は、教会論、特にエペソ書 4:11 に対する我々の理解と、今日における使徒と預言者の活動についてであるように思われます。

興味深いことに、使徒 3:21 のギリシャ語は、約束された回復の正確な「時点」(timing) について明らかにしていません。それゆえ、私たちの翻訳も、「万物が新しくなるその時まで」(until) という語を使用して、意図的に曖昧にしています。ギリシャ語の意味するところは、この回復(少なくともその大部分)は、キリストの再臨へと至る「ある期間」(period) もしくは時期(times) に起こる—すなわち再臨の「前」(before) あるいは再臨に「際して」(at) 起こる、と解することが可能です。使徒 3:21 および他の多くの聖句に基づいて私たちが理解するところは、回復の「時」は再臨の前か、それとも再臨の時のいずれか、という問題ではなく、そのいずれもが正しいということです。別言すれば、キリストの再臨前に起こると想定されることは多くあり、そ

こには再臨の「条件」も含まれているのですが、完全な回復は再臨に至って始めて実現されるということです。

私たちは、王がここエルサレムから治め、統治するようになるまで、王国(御国)が完成されるのを見ることはないでしょう。その意味で、私たちは、王国(御国)がこの時代に教会を通して完全に確立され、これが再臨のイエシュアにそのまま引き渡されることを信じる後千年王国説(post millennial) もしくは統治主義者(dominionist) には組みません。かえって、私たちは、初代教会が有していた歴史的な前千年王国説(pre millennial) を固く信じています。しかし、なお、この時代において、ある程度までは御国が完成へと向かうことに対する約束と明白な聖書的な期待が示されていることも事実です。では、今の時代に、どれくらい完成へと向かうことを私たちは期待すべきでしょうか。どこまでの完成を私たちは飢え乾いて求めるべきでしょうか。30%、50%、あるいは80%でしょうか。数を示すのは困難ですが、後に具体的な論点について回復主義神学の立場から説明するように、私たちは、主が来られる日まで、信仰と聖霊により、御国の完成に向かって、能う限り—すなわち主が私たちキリストのからだによってもたらすことを選ばれる限りの目一杯を求めて戦うべきであると信じます。

……………(中略)……………

次に私たちは、Tikkun の回復主義神学におけるイスラエルと教会の双方に関する論点—その多くが重なり合う—を見ていきます。まずはイスラエルにおけるほとんどのメシアニックジューのリーダーにとって異論のない点から始めて、次に最近の対論の中で特に争点となってきた論点に移りたいと思います。

第1章 イスラエルの物理的・霊的回復

A. ユダヤ人が父祖たちに約束された地に集結すること—イスラエル国家の物理的回復

私たちは聖書的なシオニストであり、現代における、この約束の地へのユダヤ人の集結は聖書預言の成就であることを恥じることなく信じています。また私たちは1948年にイスラエル国家が再建され、多くの戦争とその他の挑戦をくぐり抜けてなお存在し続けて今日の繁栄を見ていることは、聖書預言の成就が大いに加速していることとしるしであり、主の再臨が近いことを示すさきがけであると信じています。

B. イスラエルの霊的回復—離散地における、とりわけイスラエルの地におけるレムナントとしてのメシアニックジューの復活

私たちは、ユダヤ人がイエスを信じ、今日メシアニックジューの共同体—救われたイスラエルのレムナント—がリバイバルされ、成長していることも、同様に聖書預言の成就であると信じています。ローマ書 11:11-15 において使徒パウロは、将来におけるユダヤ人のリバイバルを予見して、それが「なおさら」「死者の復活」を世界にもたらすと述べています。使徒の働きを見ると、1世紀のエルサレムにおいて、ユダヤ人の間に大いなるリバイバルが興されたことが分かり

ます。しかし、最終的に、イスラエルの多数派一とりわけそのリーダーたちは、イエシュアを拒絶してしまいました。この拒絶を使徒パウロは「つまづき」「背き」と呼んでいますが、このことが神のご計画の奥義において、実際に「福音の豊かさ」となって諸国の民にもたらされたのです。その上で、パウロは、12 節と 15 節において、将来のユダヤ人のリバイバル、すなわちユダヤ人が「受け入れられること」と、諸国民のための一層偉大な福音の豊かさに結実する「完成」を見始めていました。そしてユダヤ人が受け入れられ、完成されると、遂には、1 世紀に見られたよりも一層偉大な世界大のリバイバルを呼び覚ますことになるのです。私たちは、このことを、今日、中国、ネパール、アルゼンチンなど、教会史上前例のないほどのスピードと規模のリバイバルを経験した国々において認めることができます。私たちは、「より一層偉大な豊かさ」が諸国民の間に注がれている、まさに只中に生きていることを信じているのです。

..... (中略)

C. エルサレムの回復

私たちはこのことを、イスラエルの物理的回復の一部として論じることもできるのですが、聖書は確かにダビデの子の王国における「大王の都」(詩篇 48:2) に特別な地位を与えているので、それ自体を独自の範疇で論じる価値があると信じます。6 日戦争の結果、エルサレム旧市街もしくは東エルサレム(聖書におけるエルサレムの大部分) がマカバイの時代以来始めてユダヤ人の管理下に帰せしめられたことは聖書の預言の成就であると信じます。新約聖書では、このことはイエシュアがルカ 21:24 および マタイ 23:37-39 において宣告されたことと関係しています(さらにはイザヤ 62:1-4、58:7-10 を参照のこと)。私たちはイスラエルの物理的な回復が聖書に記された約束の地において起こる必要があったのと同様に、エルサレムを首都とすることなしにイスラエルの聖書的な回復は完成されないと信じています。

D. 結論

私たちは、イスラエルとエルサレムの回復についての以上の諸点は、多数のイスラエルのメシアニックリーダーたちにとって問題の種になるものではないと信じています。私たちはまた、そのほとんどのリーダーが、これらのことを主の再臨前に起こるべき条件(pre-conditions)と見ていることと信じます。

..... (中略)

しかし、このすべてが、先に使徒の働き 3:21 に関して問うたところの終末論的な難問に繋がっているのです。私たちは、主が再臨されるまでに、イスラエル、エルサレムそしてメシアニックジューの信仰がどの程度まで回復されるのを見ることを期待すべきなのでしょうか。今日、イスラエル

には約 700 万人のユダヤ人が住んでいますが、北米にはまだ 600 万人のユダヤ人がいます(加えて、数十万人のイスラエル人がイスラエルから逆にアメリカに移民して、NY やマイアミ、そして南カリフォルニア地域に住んでいます)。また数十万人のユダヤ人がなおフランス、旧ソ連諸国、南米、エチオピア等々に暮らしています。そこで、ユダヤ人の帰還(Aliyah)が完成されるために、どれくらい为民が帰還することを祈り、またそのために働くべきなのでしょうか。

確かにほとんどのイスラエルのメシアニックリーダーたちはユダヤ人のイスラエル帰還は「神から出たこと」であり、「預言の成就」であると信じていますが、同時に、メシアニックジューがどれくらい信仰、時間、エネルギーそして資源をより成功的な帰還のために捧げるべきであるかということについては、意見(及び召命感)の違いがあり得ることに同意しています。それは「イスラエルはみな救われる」ということと同じ意味ではないのでしょうか(ローマ 11:25-26)。私たちは主が実際に再臨するまで、もしくは再臨の直前まで、「みな」という部分は起こらないことに同意しないのでしょうか(ゼカリヤ 12:14)。もちろん、そうだからと言って、主の再臨までは、さほど伝道の務めに励まなくてもよいなどとは、私たちのうち誰も考えていません(そう願います!)

エルサレムの回復についてはどうでしょうか。私たちのほとんどが、最近、エルサレムをイスラエルの首都と認めたトランプ大統領の言明と、それが諸国にもたらした反響(エルサレム問題をどのように扱うべきか)を、重要な預言的出来事だと信じているのではないのでしょうか。しかし他方で、主が再臨されるまでは、イザヤ 62:1-5 の 100%の成就是不ことも私たちは知っているのです。

このように私たちは、「回復主義」に関わるあらゆる点について、御国の現実が「すでに(成った)」と「未だ(成らず)」の間にあるという「逆説としての奥義」の只中にいるのです。もしあえてパーセンテージでこれを示すなら、メシアニックジューの主流とイスラエルを愛するクリスチャンリーダーたちのスタンスは、主の再臨前に私たちが見ることを期待すべき、千年王国到来前におけるイスラエル/エルサレムの回復の程度を示す数値として 20%から 80%のスペクトルの間にあるでしょう。また、数は非常に少ないものの 0%(現代イスラエルに暮らすことは歴史的に見ても非常に困難なことであり、期待値 0 というのも信じられる)の地点に立つ者もあれば、イエシュアが地上において戴冠されることなく、教会が完全に世界を治めることを信じる統治主義もしくは後千年王国説を信奉する者であれば、100%という強硬論に立つでしょう。

1 ジェームズ王欽定訳によれば、この箇所は次の通り訳されている。

19 Repent ye therefore, and be converted, that your sins may be blotted out, when the times of refreshing shall come from the presence of the Lord;

20 And he shall send Jesus Christ, which before was preached unto you:

21 Whom the heaven must receive until the times of restitution of all things, which God hath spoken by the mouth of all his holy prophets since the world began. (下線訳者)

日本語訳と英語訳では、19 節と 20 節の区分の仕方が、ずれていることに注意されたい。

LCJEは、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJEとして支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断していただきますよう、お願いいたします。

2019年度祈禱会予定

場 所	8月	9月	10月	会 場
大阪(6:30より)	8日	12日	10日	北浜スクエア(VIP関西センター8F)
東京(1:30より)	10日	14日	12日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】第二木曜日午後6時半開始です。

【東京祈りにご参加される方へ】ご注意ください▶通常祈りの会場は、811号室ですが、変更される場合があります。階下の掲示板をご覧ください。

トロントで開催される LCJE 国際大会へのお誘い



【日 時】

2019年 8月11日~16日

【場 所】

**Novotel Hotel, North York,
Toronto, ONTARIO**

【国際大会のテーマ】

“すべての物を新しくする”

※ 詳しくは <https://www.lcje.org/> で検索

【メシアの家】ご寄付の振込先

＜ゆうちょ銀行＞

記号 10080

番号 87052131

メシアノイエ

※ 他銀行からお振込の方は店名、店番が必要になります。

店名 00八(ゼロゼロハチ)

店番 008

普通預金 8705213

※ お振り込みいただいた後、ぜひ Email にてお知らせ下さい。皆さまに主の祝福が注がれますようにお祈りしております。

LCJE日本支部2019年5月度会計

収入・献金		支出・現金	
科 目	金 額	科 目	金 額
献 金	225,800	事 務 費	12,800
大阪祈り会席上献金	50,000	NEWSレター製作費	50,120
		郵 送 費	49,780
		郵便振替手数料	4,200
		通 信 費	5,500
		賃 借 ・ 管 理 費	21,600
		高 熱 費 ・ 共 益 費	8,900
		謝 儀	30,000
		交 通 旅 費	7,000
		祈 り 会 経 費	14,000
合 計	275,800	合 計	184,900
		差 引 残 高	90,900
前月よりの繰越	150,167	翌月への繰越	241,067

事務局よりのお知らせ

サハリンの祝福記事は、次月号に掲載いたします。LCJE日本支部では、皆様からの声、そして証や、記事の御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いずれも大歓迎いたします。文字数は2000文字前後をお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM 又は [FAX 072-867-6721](tel:072-867-6721) まで。宜しくお願い致します。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

コ・ワーカーの皆様お元気にお過ごしでしょうか。今月もユダヤ人への伝道を進めていく道筋に新たな「知恵」が上から与えられている事感謝します。「知らずに共存」から「知って共存」私たちは今、主にあつて謙遜に、謙徳的に聖書をさらにさらに深く読み進める必要があると思われています。今月も、まだ主とお会いしていないユダヤ人には一日も早く主とお会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。是非大阪祈り会、東京祈り会へもご出席くださり、イスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。コ・ワーカー一人一人に主の祝福がありますように。シャローム

CJE日本支部事務局長 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝